

DATA FILE



六方晶系

名前	DIOPTASE (ジオブテーズ) / 翠銅鉱
化学組成	$\text{Cu}_6\text{Si}_6\text{O}_{18} \cdot 6\text{H}_2\text{O}$
色	緑色など
光沢	ガラス光沢
蛍光	なし
条痕	緑がかった淡い青色
劈開	完全
断面	貝殻状、凹凸状
硬度	5
比重	3.3

翠銅鉱 DIOPTASE

酸化した銅の鉱脈の一部や、それらを取りまく岩石のくぼみや穴の一部で見つかる翠銅鉱は、藍銅鉱や方解石、白鉛鉱、ケイ孔雀石、褐鉄鉱、水鉛鉛鉱と共生している。

コンゴ（旧ザイール）で産出した、放射状に集まっている翠銅鉱。

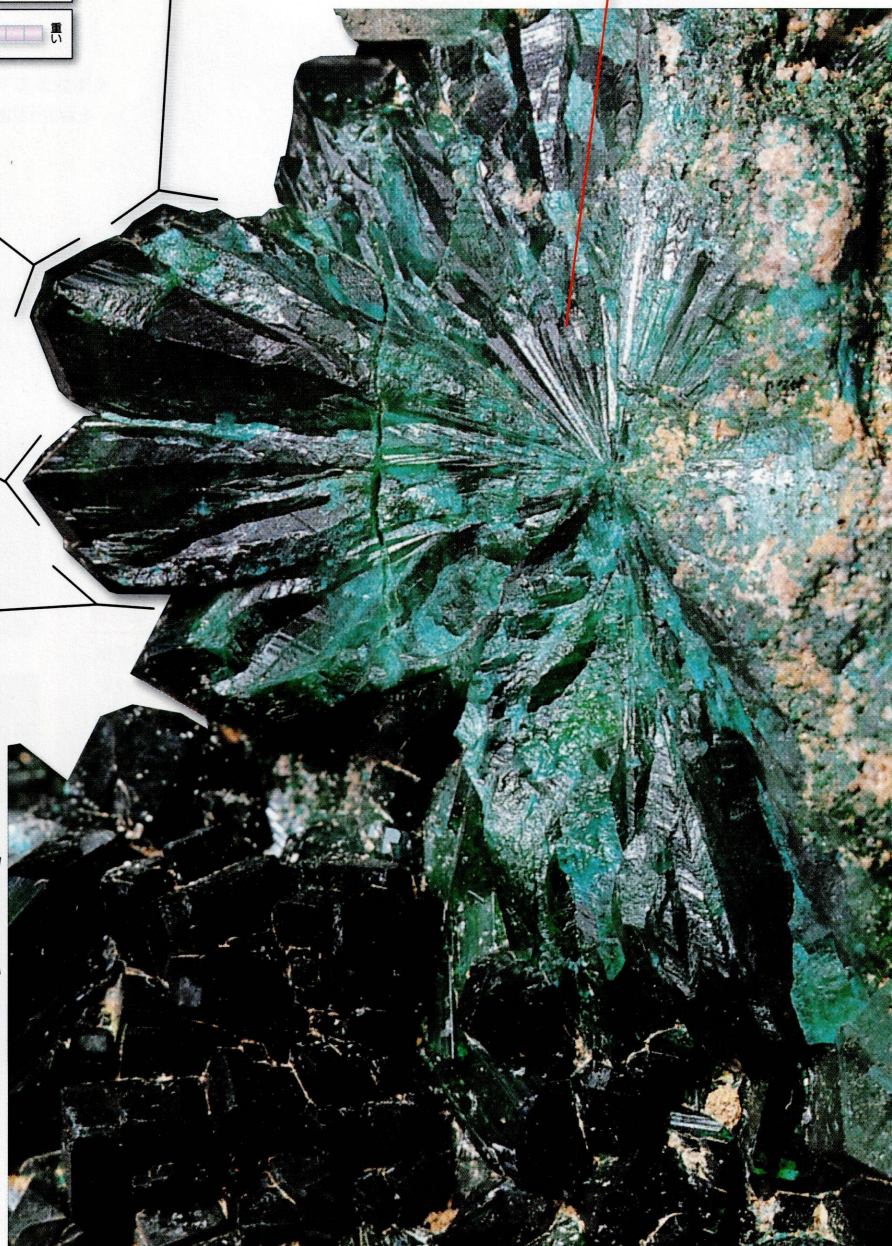
結晶は、板状あるいは平面からなる菱面体の集合体であることが多い。

劈開は完全で、素焼きの陶板にこすりつけると緑色がかった淡い青色の条痕が残る。

翠銅鉱は、水素と酸素を含んだ銅からなるケイ酸塩鉱物のなかま。

角度によって、色が異なって見える多色性の性質を持っている。

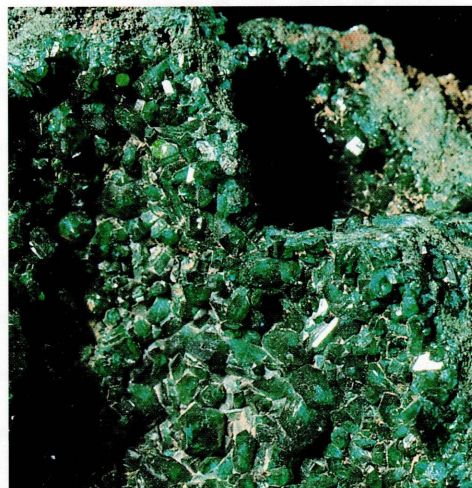
ほとんどは透明な緑色をしているが、緑色が強すぎて半透明に見えるものもある。そのほか、ごくわずかであるが、青色の結晶も存在する。



エメラルドと見まがうほどの美しさ

翠銅鉱は、カザフスタンで最初に発見されたとき、美しい透明な緑色をしていることからエメラルドに間違われ、ロシア皇帝に届けられたというエピソードも残っている。しかし、のちに結晶の形や成分の分析が行われたところ、エメラルドとは違う鉱物であることが判明。透明度が非常に高いため、「通して」と「見える」を意味するギリシャ語の「ジオプテーズ」から鉱物名がつけられた。

小さな結晶の集合体としてあらわれる翠銅鉱は、そのひとつひとつをばらばらにして宝石にするよりも、集合体のままのほうが見た目がよく、大きなものほど価値がある。また、柔らかく、劈開があるため、カットする宝石には向いていないが、観賞用として人気が高い。



▲岩石をおおっている
翠銅鉱の結晶。

◀褐鉄鉱のすきま
をおおう翠銅鉱。

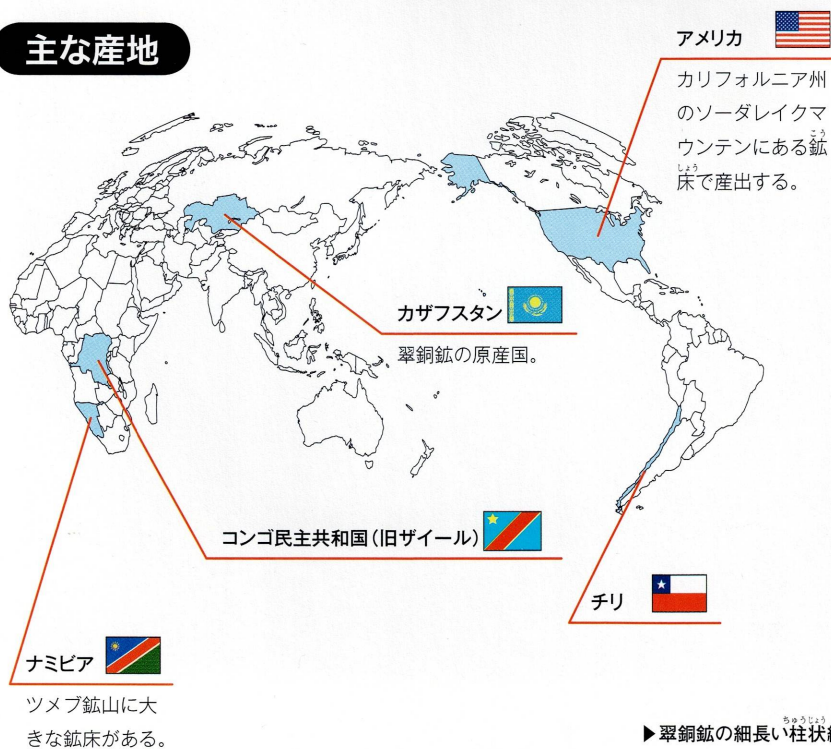


▶ラウンド・カット
された翠銅鉱。

酢酸が効果的

共生鉱物である方解石の上にできた翠銅鉱を傷めずに取り出すには、酢酸を使用するのが効果的。しかし、同じ酸でも、塩酸や硝酸には溶けてしまうため注意が必要だ。また、アンモニアに溶ける性質も持っている。

主な産地



▶翠銅鉱の細長い柱状結晶。